伊豆半島におけるアカウミガメ保全のための冊子作成

田中章　研究室
1461039　小峯　隆徳

１．背景と目的

ウミガメ類は健全な砂浜環境のシンボルとして、海岸保全の対象とされることが多い（渡辺ら，2003)。北太平洋に生息するアカウミガメ個体群の中で約 95%ものアカウミガメが日本を唯一の産卵地としている（B.W.Bowen ら，1995)。このことから、アカウミガメの産卵地である日本の砂浜を保全していくことが大変重要である。しかし、日本では浸食被害や、それに伴う対策工事によって海岸の人工化が急速に進み、古くからあった自然海浜は失いつつある（宇田，清野，三波，2005)。

地域社会の変化を見るうえでは、単なる年代記を調べることではなく、どのような歴史的変遷を経て今日に至っているかを知ることが重要である（山本，大塚，石川，2015)。このことから、アカウミガメの産卵も定量的に残されたデータのみならず、昔から住んでいる地域住民の情報を集積することで過去からの変遷を明らかにしていくことは重要であると考えられる。

そこで本研究では、当研究室が長年活動を行ってきた静岡県伊豆半島において、アカウミガメ産卵地の変遷を明らかにするために地域住民からアカウミガメに関する情報を集積した、アカウミガメ保全のための冊子作成を目的とした。

２．研究方法

アカウミガメの生態や、静岡県での産卵の実績、日本での保護政策などアカウミガメ産卵地保全を行うために必要となる基本的な情報を文献調査にて得た。また、伊豆半島でのアカウミガメ産卵地の変遷を明らかにするために元海女の女性と元海女師の男性に対してインタビュー調査を行った。また、伊豆半島での産卵の変遷を明らかにするために、伊豆半島の自然に関する知識を有する伊豆半島ジオガイド協会のガイドの方を対象にアンケート調査を行った。

３．研究結果

３-１．アカウミガメの生態について

ウミガメ類は爬虫網カメ目に分類され、熱帯を中心として分布している。その中でもアカウミガメ（*Caretta caretta*）は温帯を繁殖域に含む唯一の種である（渡辺，清野，宇田,2000)。アカウミガメは日本では環境省（2017）で絶滅危惧ＩB 類に指定されている。また、静岡県（2017）では絶滅危惧ＩA 類に指定されている。

３－２．静岡県におけるアカウミガメの産卵実績

2017 年の産卵のうち、今回の文献調査から伊豆半島では、6 月 8 日に沼津市富士海岸、6 月 30 日に南伊豆町弓ヶ浜、7 月 29 日に下田市田牛海岸で産卵が行われた。伊豆半島以外の静岡県内では牧之原市相良海岸でアカウミガメ保護団体であるカメハメハ王国（2017）が 6～8 月の間に 20 回の上陸中 15 回の産卵を観測した。また、御前崎市において 5 月 27 日に産卵が確認されている。

３－３．アカウミガメ保護政策

日本においてはアカウミガメ保護政策として国、都道府県ごとに様々な政策を行っている。日本で

はワシントン条約での商業目的の国際取引の規制や、種の保存法、自然公園法などに基づく政策を行っている。静岡県ではアカウミガメを指定希少野生動植物にアカウミガメが指定されているため、生きている個体は、捕獲、採取、殺傷又は損傷をしてはならない。また、学術目的や繁殖目的での捕獲には許可が必要である。伊豆半島においては南伊豆町において南伊豆ウミガメ保護条例が策定されている。

３－４．伊豆半島におけるアカウミガメの変遷

インタビュー調査を行った結果を表１にまとめた。終戦後すぐにはアカウミガメやその卵を食料としていたことから、産卵のための上陸が多かったことが考えられる。1955 年頃には稚ガメが海に帰る様子を何度も見たことがあると話していた。1960 年頃には伊豆急下田駅の開業やホテル、民宿が建ち始めたことから、砂浜周辺の環境が昔と比べて変化してきていることが分かった。

伊豆半島ジオガイド協会のガイドの方からのアンケート調査から得られた回答によると、ほとんどが伊豆半島でアカウミガメが産卵を行っていることを知ってはいるが、アカウミガメの産卵や上陸、稚ガメの帰海様子を見たことがないと回答していた。また、見たことがある人でも 2007 年や 2013 年など比較的最近にしか目撃したことないという結果だった。過去から現在までの砂浜の変化としては、多くの方が砂浜周辺の環境が変化したと回答しており、昔は自動販売機や街灯がほとんどなく、夜になると真っ暗であったと回答していた。また、砂浜周辺に住宅が建ち始めたことや、道路が整備されてきたことなど伊豆半島全体で自然の砂浜が減少していることが明らかになった。

４．考察と結論

アカウミガメの基本的な情報から政策面までを文献調査を行ったことでアカウミガメに関する幅広い内容を網羅した冊子を作成することができた。また、伊豆半島に長く暮らす方や長年働いている方にインタビュー調査やアンケート調査を行ったことで、伊豆半島でのアカウミガメの産卵の変遷や砂浜周辺の環境の変化を明らかにすることができた。今後はさらに多くの方からデータがなかった過去からの話を集積していくことが重要である。

表１　下田市多々戸浜周辺における変遷

年代	できごと
1945 年	終戦後はアカウミガメやその卵を食べていた。
1955 年	多々戸浜にたくさんの稚ガメが海に帰るのを数回見た。
1960 年代	伊豆急下田の開業、下田大和館をはじめとしたホテルや民宿の増加、車の普及により観光客が増加してきた。
1978 年	民宿の最盛期、観光客が多く来ていた。
1986 年	ホテルジャパン下田が開業した。
1997 年	多々戸浜にてアカウミガメが産卵を終えて帰る様子を目撃した。
2009 年	多々戸浜にて産卵と孵化及び稚ガメが海に帰る様子を目撃した。

表 2　ジオガイドの方へのアンケート結果

所在地	年齢	産卵を見た回数	帰海を見た回数
伊豆市	65	0	0
伊豆の国市	47	0	0
伊東市	66	0	0
河津町	66	0	0
下田市	72	0	0
下田市	47	0	1
西伊豆町	75	1	0
沼津市	70	0	0
函南町	72	0	0
三島市	57	0	0
南伊豆町	70	0	1
南伊豆町	回答なし	0	1
回答なし	40	0	0
回答なし	48	0	0
回答なし	53	0	0

【引用文献】

宇田高明、清野聡子、三波俊郎（2005）宮崎県一ツ葉海岸の浸食とアカウミガメの保護．環境システム研究論文集 Vol33，pp63 - 71.

山本質素、大塚朋美、石川晃司（2016）社会経済発展と農村の変容．日本大学文理学部人文科学研究所研究紀要（91），83-104.

進士利男（2017）元海女師,インタビュー．進士さん宅.2017.8.2.

槙野渥美（2017）元海女,インタビュー．進士さん宅.2017.8.2.

渡辺国広，清野聡子，宇多高明（2002）アカウミガメの産卵行動に影響を及ぼす前浜地形と海浜流の特性．海洋工学論文集，Vol. 49，土木学会，1151-1155.

Witherington，B. E. And Bjorndal K. A. (1991) : Influences of wavelength and intensity on hatchling sea turtle phototaxis : implications for sea-finding behavior, Copeia, Vol. 1991, No. 4，pp. 1060-1069.